

大和国「国民」越智家栄の動向について

——身分制の観点から——

綾 部 正 大

はじめに

中世身分制社会において、その基本構成は「貴種」身分、「司・侍」身分、「百姓」身分、「下人」身分、「非人」身分（身分外身分）とすることができると言われる。⁽¹⁾ また種々の社会集団の中でも寺院・神社は宗教上の理由により強固な内部規範を有し、外部からの干渉を排除していたとも言われる。⁽²⁾ ただし、俗世間での身分の在り方が出世間での身分の在り方に影響を与えていることは既に指摘されており、大和国でもそれは例外ではない。特に「貴種」出身である一乗院・大乘院門跡は異例の早さで昇進を遂げるとともに俗世間でいう参議に比定される僧正にいち早く就くことができた。「貴種」の入寺は、寺院内の運営ばかりか昇進過程にも影響を及ぼし、従来の「碩学」にかえて「貴種・良家」出身者が優先される状況を生み出すことになった。

また両門跡に分属し坊人となっている衆徒・国民は、大和国人として他国武家と激しい抗争を繰り広げた点で俗世間での「侍」身分に比定することができよう。ただし、衆徒は僧体であり、国民は春日社神主職保持者であるといった相違点があ

ることは周知の通りである。⁽⁵⁾ そうして史料を見ると、このような相違点の存在は、衆徒・国民の動向に影響を与えたのではないかと思われるのである。そこで衆徒・国民の相違点について検討を加え、その相違点が両者に与えた影響について考えてみたいと思う。なお、本稿では十五世紀後半に大きな勢力を有していた国民の越智家栄を中心に見ていくことにする。

一 身分制から見た衆徒・国民について

大和国の衆徒・国民は十三世紀半ば以降に出現してくると言われる。⁽⁶⁾ 鎌倉期には俗世間の身分制が出世間の支配体系に浸透し、固定化していったと指摘されているが、⁽⁷⁾ それと時期を同じくしている。衆徒は元来興福寺の僧全体を指す言葉であったが、この十三世紀半ば以降には、僧侶の中でも特定の階層——下臈分を意味するようになる。⁽⁸⁾ 一方の国民は「国衙領民」にその名称が由来すると言われ、当初多武峯を頼っていた土豪が、その衰退にともない多武峯に代えて春日社の權威を頼ろうとし、神主職を獲得し発生してきたようである。⁽⁹⁾ 衆徒・国民ともに子弟を寺院内に送りこんでいるが、国民が衆徒身分を獲得している例は管見の限りでは見られない。これは俗世間の身分制が浸透することにより、衆徒の家の出身でなければ衆徒にはなれないというように家柄が固定化されていたことを示していると言えよう。⁽¹⁰⁾

衆徒の場合はその「器用の輩」⁽¹¹⁾ が官符衆徒となることができた。この官符衆徒は奈良中雑務検断職を有する等、他の大和国人に比べて優越的な権力を持つものであり、それ故にこの官符衆徒のポストは大和国人にとって羨望の的であったようである。それは衆徒筒井氏・古市氏が盛衰を見せる際に、官符衆徒就任にこだわっている事例からも指摘することができる。⁽¹²⁾

一方の国民においては、官符衆徒のように雑務検断職を有した例は見られない。また永島福太郎氏によると衆徒を御家人と

すれば、国民は准御家人として把握できるという説明がされている。⁽¹³⁾つまり衆徒・国民は「侍」身分に比定できるものの、出自によって就くことのできる職が制限されており、かつ国民は衆徒より下位に位置づけられていたと言える。次に具体的事例を取り上げてみよう。

(前略)但尊舜者修学分洛不_レ存_レ知之間、不_レ及_二是非_一候、同臈之時衆徒子と国民子とハ、可_レ有_二差別_一事候間、別段之儀候ハてハ、衆徒子をさしをき候て、国民の子を召加候ハん事ハ、先例候ぬとも不_レ覚候(後略)

この記事は三十講論匠を、臈次がともに十二臈である衆徒福智堂の子定英と国民箸尾の子尊舜が争奪しており、大乘院門跡の尊尊が当時興福寺の別当であった経覚に尋ねた際の返事である。⁽¹⁴⁾ここで経覚は、衆徒の子をさしおいて国民の子が先に論匠になることはできないと述べている。寺院内での昇進には出身身分が影響力を有しており、衆徒であるか国民であるかということがその出世に影響を及ぼしていたことが分かる。次に在地で活動する衆徒・国民について見てみよう。

伝聞、古市与越智間事大略不和云々、条々子細在_レ之、自_二越智_一召_二出安楽坊_一可_レ成_二筒井支度_一也云々、今度上洛御礼之時、古市ハ律師也、衆徒也トテ絹付衣ヲ著、自_二国民越智_一ハ上階振舞、越智弟也、失_二面目_一了云々、腹立無_二是非_一、(後略)

この記事は当時大和国人の中でも最高実力者であった国民越智氏が衆徒古市氏の前で面目を失ったことを伝えている。⁽¹⁵⁾ここで国民越智が面目を失っているのは、古市が律師であり衆徒であるという点に由来していることが分かる。永島氏もこの記事を取り上げ、「家令(家栄の息子―筆者註)は澄胤の義兄にあたるので、これ(古市澄胤が越智に対して上位の振る舞いをしたこと―筆者註)に憤激したのである。そして筒井氏に新主を立てて古市氏に当たらせるといいうやがらせをしている。ここに衆徒・国民の古制を澄胤はかざした」と説明しておられる。⁽¹⁶⁾しかし、これは単に「古制」が持ち出されただけで

なく「現実的」な効力を有していたのではないと思われる。そこで、以下において越智家栄の動向についてさらに具体的に考察を加えていくことにする。

二 国民越智家栄の動向

越智家栄は、筒井・古市とともに十五世紀中頃から大和国の中で抗争を繰り広げた国人である。まず、彼の動向の中でも官位・受領名の獲得という点に注目してみたい。それは、侍身分であるか否かを区別する指標として官位を有しているか否かがあげられることは周知の通りであるが、越智家栄と衆徒筒井・古市との官途獲得の仕方にもまた相違点を見いだすことができるからである。

まず越智家栄は官途として弾正忠を有しており、ついで明応二（一四九三）年の細川政元のクーデターに加担した際には先祖の例とされる伊賀守になり、後には修理大夫を称している。⁽¹⁸⁾一方の衆徒筒井・古市の場合はやや異なる様相を見せる。官途の獲得という点では共通しているのであるが、彼ら衆徒の場合は出世間での身分を表す権律師を獲得しており、国民越智のような俗世間で通用する官職を得ていないのである。そこで他の大和国人に目を移してみても同様のことが言える。国民の十市氏は新左衛門尉・播磨守、その舎弟の八田氏は弾正忠を称している。また布施氏は播磨守を称している。⁽¹⁹⁾しかし一方の衆徒においては俗世間の官職を獲得している例は見られない。衆徒は僧体ということで僧官僧職を獲得し、大和国を支配していた興福寺の下で、その権威づけをはかることが可能であったが、国民にはそれができなかった。

次に官符衆徒就任について見てみよう。衆徒は官符衆徒となり、奈良中雑務検断職を得たことは先に述べた。衆徒筒井・

古市は、その就任について中央の権力者へ積極的に働きかけている。また筒井・古市の関心事が官符衆徒に付随する奈良中雑務検断職の獲得にあったことが次の記事から分かる。⁽²⁰⁾

伝聞、古市筒井申合子細在^レ之、奈良中雑務事者、兩人各度ニ可^レ持^レ之事、箸尾井戸兩人ヲ、古市自^レ筒井可^レ出云々、此趣ヲ申合必定々々云々、仍自^レ古市色々難^レ成条目共、越智へ所望、第一此間提方知行筒井跡事申^レ之云々、如何様□
□可^レ相替^レ歟、

古市と越智は当時（文明十九年）同盟関係にあったにもかかわらず、古市が反抗の意志を表していることが分かる。古市にとってこの申し合わせには、勢力伸張はなほだしい越智を牽制する意図があったと考えられる。そこで古市は筒井と手を結ぼうとしたのであろうが、その条件として両者が奈良中雑務検断職を交替で持つことが取り上げられている。これから奈良中雑務検断職の獲得に対する古市・筒井の関心の高さを知ることができる。

国民越智は、官符衆徒の人事に口をはさむことはあったが、奈良中雑務検断職を得ることはなかった。これは彼が国民身分の出身であることに由来する。これに対して衆徒古市・筒井は雑務検断職を振りかざして越智に対抗してきたのであるから、越智にとって雑務検断職の保持が可能である官符衆徒の存在は脅威的なものであったと言える。しかしそれに越智は甘んじてはいなかった。越智は雑務検断職を保持する者との提携を結ぶことによって、官符衆徒の行使する雑務検断職に影響を及ぼそうとしたと思われる。先に古市が越智に対して抵抗しようとした事件に際して、越智は筒井と提携して（縁組を結んで）、古市の動きを封じこめている。⁽²¹⁾その他の時期においては越智は古市と提携している。官符衆徒は興福寺の支配体制の下で別当の被官という位置にあるとともに、室町幕府から奈良中雑務検断職を与えられるという特権的位置にあった。⁽²²⁾それに比して越智は、庄官としての位置付けはあるものの国民身分の出身であるが故に衆徒より下位に位置付けられるという

不利な状況に置かれていた。越智が実力をもって軍事的主導権を握っても大和国人の頂点に立つ正当性の点では、官符衆徒ほどの正当性を確立することは困難であったと考えられる。そこで越智は官符衆徒を同盟者という形で彼に従属的な位置にすることで、国民につきまとう正当性の欠如部分を補なおうとしたと考えられる。この雑務権断職保持者との提携にとどまらず、越智は国民身分であるがゆえにつきまとう正当性の欠落部分を補完しようとする動向を見せている。そこでこれを以下において取り上げてみよう。

三 越智家栄の勢力拡大

官符衆徒は、用錢・有徳錢・相舞錢・郷錢・頼母子などの徴収と人夫・伝馬・陣馬の調達が可能となる諸賦課権を有していた。そうして、古市・筒井の場合は、官符衆徒の名を利用して、自らの財政基盤を固める等の越権行為をしていた。⁽²³⁾ 官符衆徒でない国民越智の場合は庄官としての徴収はあるものの、賦課権は持っていなかったようである。このような越智のおかれた立場が、彼の大規模な「私反錢」賦課を生み出していくことになったのではないかと考えられる。

越智の私反錢については有名であり、それに関する記事も各所に見られる。⁽²⁴⁾『大乘院寺社雜事記』文明十二（一四八〇）年九月二十二日条では、越智から私反錢を停止することができないと言ってきたことが記されている。この時は筒井・古市も私反錢を計画していた模様で、越智の返答次第では両者もまた私反錢をかけようとしていたようである。興福寺は各所に使節を送り越智をはじめとする国人に対して説得工作にあたった。しかし、功を奏さず興福寺学侶は閉門して対抗しようとしたことが記されている。⁽²⁵⁾ 興福寺は国人の起こす数々の混乱に対して五社七堂を閉門しており、このような閉門は興福寺の諸

法会の開催を不可能とした。したがって五社七堂の閉門は朝廷に対して国人の違乱をアピールするという意味合いがあった。ところが今回の事件では越智方の学侶が申し合わせて閉門を延期することにより興福寺の対抗手段を封じている。その上で越智は妥協の態度を示し、奈良成（興福寺・院家の取り分）⁽²⁸⁾については私反錢をとらないという提示をしてきた。越智のこの後の私反錢のとり方については「奈良成」はとらないという形が定着している。⁽²⁹⁾官符衆徒の場合は、先述のように税の徴収権により、自らの収益を確保することができた。この官符衆徒のありかたに対して、越智は学侶を背後から動かし、彼を得ることのできない諸賦課権に代わるものを獲得することをもくろんだと言えよう。興福寺は越智の行為を私反錢と称している。しかし、越智は奈良成についてはとらないという条件をつけることで興福寺にその徴収を公認される道を切り開いていったのである。『大乘院寺社雜事記』文明十八（一四八六）年九月五日条では、

学侶使節宗藝五師・慶英律師・了弘律師（五師）・尊藝律師・昌懷律師・堯藝擬講、先日より可_レ下_二向越智之所_一、宗藝風氣云々、明日各司_二下向_一也、一国中私反錢事、明年夏麦時分ニ相延者可_レ畏入、御造官反錢事、百姓等難_二沙汰_一之由、申入之間、寺門迷惑也、私反錢故実可_レ為_二神忠之趣_一也、寺門作法以外次第也、可_レ歎々々、

と伝えられる。この記事では、学侶から越智の私反錢を停止するのでなく、夏麦の頃まで延期してほしいということが伝えられていることが分かる。このことから越智の私反錢が寺門の妥協を引き出すことにより、事実上公認されていたと言える。越智は軍事力を背景として、官符衆徒の有する諸賦課権に対抗しうる収入源獲得の方法を確立しようとしていたと考えられる。

越智の勢力の伸張は「私反錢」ばかりでなく、興福寺が振りかざす神・仏罰についても影響力を及ぼすようになる。先述の寺社閉門はその一例であるが、籠名についても同様の事例が見られる。

庄園に關係する違乱が生じると学侶・六方が中心となつて使節を派遣した。それでも國人が承知しない時に、学侶集会や学侶・六方集会でその國人の籠名が決定された。この籠名は、國人の名前を書いた紙を兩堂修正手水所の釜の中に入れたり、五社七堂に入れたりした後、大般若や五壇法を唱えて呪咀を行なうことである。そのことにより、神・仏罰が國人達にふりかかるという考え方があった。また春日社への社参ができない・若宮祭の願主人を勤めることができないといった拘束力があつたと言われる⁽³¹⁾。筒井派が勢力を誇つた時期には、その派閥に属する学侶が中心となつて「籠名」「寺社閉門」を免除・延期していたが、越智もその勢力伸張にともない同様の策動を起こすことになる⁽³²⁾。

延徳三（一四九一）年四月七日条から始まる事件では、越智の引汲衆である小夫が「籠名」されたことが伝えられ、これに対し、越智が軍勢を率いて圧力をかけ越智方六方が敵方の寺僧を罪科に処し⁽³³⁾、「籠名」を解くに至っている⁽³⁴⁾。さらに明応二（一四九三）年の段階では、越智自身に対する「籠名」が興福寺側の自主的回避により行われないう事態まで生じている⁽³⁵⁾。

この「籠名」「寺社閉門」を越智・筒井が学侶等を通じて延期・免除させた背景には、自らの収益及び自派閥に属する弱小國人層を保護する意味合いがあつたと思われる。ただし越智に注目した場合、より大きな意義があつたと思われる。官符衆徒筒井と同様に所属の大和國人を神・仏罰から保護することで、国民出身であるが故に脆弱となる正当性の補完を計ろうとしたのではないかと考えられるからである。

おわりに

『大乘院寺社雜事記』明応三（一四九四）年十月八日条で、越智家栄が一乗院門跡領を違乱していることが伝えられている。この事件は長期化することはなかったが、実質越智の活動の集大成の様相を見せる。

問題が発生すると一乗院門跡は隱居の意向を示す。⁽³⁶⁾ただし、一乗院は対抗手段もっており、御房中集会を開き若宮祭祀を延期することに賛同するよう学侶集会に申し送っている。ついで学侶から六方に伝えられているが、学侶・六方は混乱を見せているようで、古市を頼っていることが伝えられている。⁽³⁷⁾越智の方は例えば、十一月十三日に息子家令の娘と古市の間に親子の契りを結んだり、⁽³⁸⁾学侶五師の人事について自派閥の宗信得業を強引に就任させようとしていることが分かる。その際越智は、宗信得業が学侶五師に就任できない場合は、龍門庄の年貢を横領するとして圧力をかけている。⁽³⁹⁾古市との縁組や学侶の代表である五師に越智の息のかかった者を据えようとする越智の動きには、今回の事態を彼にとって有利に展開させようとする用意周到さを伺わせるものがある。

以上のような綿密な細工が施されたこの事件であったが、その結果がどのようなものになったのかは残念ながら史料の上からは明らかにならない。ただし、大和国で身分制の頂点に位置する貴種出身の門跡に対して、国民出身の越智が圧力をかけ、一時期には一乗院門跡が隱居の意向を示す状態にまで追い込んだ点が注目されるのである。しかしこれからという時に越智家栄は没してしまう。それは明応四年十月二十五日のことであつた。⁽⁴⁰⁾

越智家栄は、国民出身であることで官符衆徒に比して正当性の点で欠陥を有していた。それを官途の獲得や雑務検断職を

有する官符衆徒との提携を通して補なおうとしてきた。また興福寺が神・仏罰を「寺社閉門」「籠名」という形で振りかざそうとした際には、それを延期・免除することで筒井派に対抗した。これらの行動を通して越智は着実に大和国人の頂点に位置するための正当性を確立していったと考えられる。彼の私反銭が興福寺の公認という形でまかり通っていた事実や、大和国の身分制の頂点に位置する門跡に対して、圧力をかけることが可能となった点からもそれは指摘できる。しかし、彼の動向に限界があったことも否めない。それは越智がどれほどあがこうとも中世社会の根幹にある「身分」という大きな壁に直面せざるをえなかったという点に起因する。雑務検断職を有することができなかった越智は、官符衆徒と提携するのも、彼の立場が危うくなる危険性を常にはらんでいたと言える。また官符衆徒との提携は筒井・古市の勢力の温存という結果も生み出したと考えられる。それ故に越智が没落すると筒井方が復活するという状況を生み出したように、越智が絶対的に有利な地位を築くことは非常に困難なものであった。

以上、越智の動向を中心に論じてきた。やや性急な論の展開部分もあり、「衆徒・国民」であることが大和国人に与えた影響についてはさらに検討する余地がある⁽⁴⁾。諸氏よりの批判をたまわり取り組んでいきたいと考えている。

〔註〕

（『大乗院寺社雑事記』は『雑事記』、『大乗院日記目録』は『日記目録』と略す。）

（1） 黒田俊雄「中世の身分制と卑賤觀念」（『日本中世の国家と宗教』所収、岩波書店、一九七五年）。

（2） 大山喬平「身分制」（『日本中世農村史の研究』所収、岩波書店、一九七八年）。

（3） 例えば田中稔「侍・凡下考」（『史林』五十九の四、一九七六年）。

(4) 平雅行「鎌倉仏教論」(『日本通史』八所収、岩波書店、一九九四年)。

(5) これについては永島福太郎『奈良文化の伝流』(中央公論社、一九四四年)をはじめとし、諸氏により指摘されている。

(6) 稲葉伸道「鎌倉期の興福寺寺僧集団について」(『年報中世史研究』十三、一九八八年)。

(7) 前掲(3)。

(8) 前掲(6)。

(9) 前掲(5)。

(10) 国民が衆徒になったという事例は史料上確認することができない。衆徒が国民とされたという例は後述(註の(41))の史料があるが、それに限られるというように衆徒・国民の家柄は固定化されていたと言えよう。また、『雑事記』康正三(一四五七)年四月二十八日条では一乗院・大乘院家の坊人名が列挙されているが、そこで衆徒・国民はそれぞれ区別して記載されていることから両者の出自が固定的なものであったと言える。

(11) 『雑事記』延徳二(一四九〇)年十二月晦日条。

(12) 『日記目録』享徳四(一四五五)年九月十六日条では、筒井が没落した際官符衆徒に豊田・山村・小泉・高山奥・秋篠尾崎が就任しているが、古市氏は春藤丸(後の古市胤栄)の代官として一族である山村を入れていることが分かる。また『雑事記』長祿四(一四六〇)年二月十一日条では、補任の例は見られないものの筒井が官符衆徒に復活していることが分かる。さらに『雑事記』文明十(一四七八)年一月十五日条では古市が官符衆徒に返り咲いていることが伝えられている。なお官符衆徒就任の際、筒井・古市ともに与力する中央の権力者(細川・畠山)に働きかけをしていることも知られる。

(13) 永島福太郎『奈良』(吉川弘文館、一九八六年)。

- (14) 『雑事記』文明三（一四七二）年閏八月十六日条。
- (15) 『雑事記』明応二（一四九三）年六月二十九日条。
- (16) 永島福太郎「古市澄胤」（『戦乱と人物』所収、吉川弘文館、一九六八年）。
- (17) 前掲（3）。
- (18) 『雑事記』文明十二（一四八〇）年十二月末日条では越智の官位として彈正忠があげられている。また明応二（一四九三）年六月十五日条では細川政元に組したことにより伊賀守に任じられていることが分かる。修理大夫については、例えば『雑事記』明応三（一四九四）年十二月二十六日条がある。
- (19) 『雑事記』文明二（一四七〇）年一月四日条では筒井順永が権律師に、延徳元（一四八九）年十一月二十四日には古市澄胤も同様に権律師に任じられていることが分かる。また、国民では十市は『雑事記』文明三（一四七二）年九月二十六日条で「新左衛門」と記されており、同年十一月二十七日日条では「播磨守」に任じられていることが分かる。また八田は例えば文明四（一四七二）年九月一日条に「彈正忠」と見える。布施は文明九（一四七七）年四月十五日条の他界の記事に「播磨守」と見える。
- (20) 『雑事記』文明十九（一四八七）年五月二十七日日条。
- (21) 『日記目録』永享六年五月十五日日条。
- (22) 『雑事記』長享元（一四八七）年九月八日条。
- (23) 『雑事記』文明十（一四七八）年五月十五日日条及び前掲（11）。
- (24) 『雑事記』延徳二（一四九〇）年十二月晦日条で、筒井・古市等が官符衆徒と称して強引に用钱・有徳銭・郷銭をかけたり、人夫役をかけ出陣させたりしていることが記されている。
- (25) 鈴木良一『大乘院寺社雑事記―ある門閥僧侶の没落の記録―』（そして、一九八三年）を参照。

(26) 『雑事記』 同月二十五日条。

(27) 『雑事記』 同月二十六日条。

(28) 「奈良成」について鈴木氏は前掲(25)で説明を加えている。参照されたい。

(29) 『雑事記』 同月二十六日条。

(30) 例えば『雑事記』明応二(一四九三)年十月二十七日条で分かる。

(31) 植田信廣「『名字を籠める』という刑罰について」(『法政研究』五十三の一、一九八六年)、安国陽子「戦国期大和の権力と在地構造」(『日本史研究』三四一、一九九一年)、泉谷康夫「興福寺一乗院大和国佐保田庄について」『龍谷史壇』九十九・百合併号、一九九二年)等。

(32) 『雑事記』寛正六(一四六四)年六月十五日条では、筒井一族の成身院光宣の力により筒井派の窪城の「籠名」を取り止めさせていることが分かる。また文明六(一四七四)年十一月二十一日条からの事例では筒井により自派閥の十市氏の「籠名」が延期されている。「寺社閉門」については『日記目録』嘉吉二(一四四二)年十一月一日条で、光宣が自らの河上五ヶ関務代官職の地位を保つために閉門を行い寺門の了解を引き出していることが分かる。

(33) 『雑事記』 同年七月十九日条。

(34) 『雑事記』 同年七月二十日条。

(35) 『雑事記』明応二(一四九三)年十一月十一日条。

(36) 『雑事記』 同年十一月十四日条。

(37) 『雑事記』 同年十一月二十日条。

(38) 『雑事記』 同年十一月二十日条。

(39) 『雑事記』 同年十月十三日条。

(40) 従来、越智家栄の死は明応九（一五〇〇）年であるという説が多いが、『雑事記』明応四（一四九五）年十月二十七日条、十二月十三日条、翌年二月十一日条等で彼の死及びそれを隠していることが伝えられていることや、越智一族の岸田・堤等の行動が活発さを見せるようになる点等を考えあわせると明応四年をとるのが妥当ではないかと考えている。

(41) 奈良歴史研究会の場で「衆徒・国民間の差別観の存在」という点を中心として発表させていただいたが、その時次の史料（『雑事記』文明二年十二月十九日条）が問題となった。

一、八田名字事、故浄顯房之孫子右衛門佐方ニ奉公、豊田扶持立_レ之、先日十市並兵庫ニ直ニ比事問答、畏入之由領状了、明日可_二入部_一歟云々、八田ハ本衆徒也、近來十市ニ被_レ落_レ取_レ之、成_二国民了_一、又如_二本衆徒可_レ知行_一者歟、為_二十市_一迷惑不_レ可_レ過_レ之、これについて、Ⅰ、「衆徒・国民間には流動的な移動があったのではないか」Ⅱ、「衆徒・国民の相違点は両者に影響力を有するものでなく、その検討はナンセンスではないか」Ⅲ、「衆徒を知行すると記されている点は、衆徒株や国民株のようなものが存在したのではないか」という疑問・批判が出された。Ⅰの疑問については、前掲(10)で述べたように管見の限りこの一件に限られることから、衆徒・国民間の移動は日常的流動的なものではなかったと考えている。また、衆徒が国民に身分的に落とされることはあっても、国民が衆徒に成り上がることは不可能だったのではないかと考えている。Ⅱの批判については本稿をもって十分に答えられたか疑問でもあり再度ご教示をいただければ幸いである。Ⅲについては今回言及することができなかった。今後の課題とさせていただきます。

〈付記〉

発表の場でご教示くださった奈良歴史研究会の皆様にご礼申し上げます。